

京都学クロスメジャー所蔵資料

多田香疇作『日本真景』

2019年、もと社会人学生の櫻井昇さんから、京都学専攻へ11冊の画帳が寄贈されました。落款（らっかん＝作品が完成した際に作者が付す署名・捺印）から、日本画家の多田香疇（ただ・こうちゅう）の作品であることが分かります。

多田は明治京都画壇を代表する幸野樸嶺（こうの・ばいれい。1844-1895）の弟子であり、1880年に開校した京都府画学校北宗にて樸嶺らとともに後進の指導を行っていたこと以外、生没年も含め情報がほとんどない謎の画家です。1913年に作られた代表的な書家・画家のランキング表『改正日本書画評価一覧』には、同じ京都画壇の有名画家竹内栖鳳（せいほう）や谷口香嶠（こうきょう）らと並んでその名が出ており、大正期においては全国的にも著名な日本画家の一人であったことが分かります。風景画や歴史画を得意とし、師の樸嶺譲りの端正な筆遣いが印象的な画家です。

本作は、1918年から1945年まで、京都や奈良などの名所旧跡をめぐり、四季折々の風景を淡々とした筆致で描いたスケッチ集です。そのうち『日本真景』と題された4巻（「清水之巻」・「大悲山之巻」・「室生之巻」・「続京都之巻一」）を展示しました。各巻の冒頭には『都名所図会』のように描いた場所の一覧が挙げられ、次いで一枚ずつ、寺院の伽藍や仏像・梵鐘などを正面・拡大・俯瞰・遠望など、さまざまなアングルから描いています。私たちがスナップ写真を撮る時の風景の切り取り方に近い印象で、香疇自ら脚を運び、スケッチしている姿が目浮かぶようです。この画帳には御朱印が捺され、所々に寺社で得た由来記の紙やお札、仏像の拓本も貼ってあり、多宝塔の画に碑文を書き添えてあるなど、歴史の記録という性格も感じられます。また、隧道や天文台など、近代以降に建造された新たな名所も描かれており、昭和戦前期の京都の景観を読み取ることが出来ます。

本作は30年ほどにわたって描きためられたもので、香疇は第二次世界大戦中にも京都に残り、スケッチを続けていたことが分かります。決して派手さや誇張も無く、練達の筆で淡々と描かれたこれらの風景画から、皆さんはどんな印象をもたれるのでしょうか。

なお、本作品はデジタル・アーカイブされており、「京都学専攻・クロスメジャー研究資源データベース」では11冊全ページの高精細画像を見ることが出来ます。まだほとんど世に知られていない本作は、立命館京都学の貴重な財産の一つです。

田中 聡 （日本史学専攻／京都学クロスメジャー）



デジタル・アーカイブの様子



『日本真景』4巻の高精細画像はこちら



「京都学専攻・クロスメジャー研究資源データベース」